

この記事は、学園内広報誌『川崎学園だより』に昨年2月から連載中の「川崎学園ヒストリア」の記事をもとに作成しています。「川崎学園ヒストリア」では、学園の精神に連なることばやエピソードを紹介しています。連載中の記事は、KAWASAKI CLUBのWebサイトの特設コーナーでご覧いただけます。

「医療福祉」、川崎病院から旭川荘、そして川崎学園、医療福祉大学開学へ

川崎医療福祉大学は1991（平成3）年、日本で最初の「医療福祉」の概念に立つ4年制大学として開学。昨年、創立25周年を迎えました。「医療と福祉は一体でなければならない」、この信念は、川崎祐宣先生が医師として川崎病院で日々患者と接する中から生まれ、やがて、「総合医療福祉施設」旭川荘を開設するに至ります。

その後、この想いは川崎学園にも受け継がれ、メディカルスペシャリストの育成にあたってのバックボーンとなっています。



● 1960 総合病院川崎病院開設

● 1956 財団法人旭川荘創設

● 1950 財団法人川崎病院設立

● 1939 外科川崎病院開院

● 1938 外科昭和医院開業

1991 医療福祉大学開学
1974 リハビリテーション学院開設
1973 医療短期大学開学
1973 医科大学附属病院開院

1971 総合病院川崎病院から
川崎医科大学附属川崎病院へ名称変更

● 1970 学校法人川崎学園設立
医科大学、附属高校開学



2016 川崎医科大学
総合医療センター開院



開学式で挨拶する川崎明徳理事長（当時）



川崎医療短期大学の第1回入学式（P1参照）

1962年、昭和天皇・皇后両陛下の旭川荘ご訪問
ご案内をする川崎祐宣 理事長（当時）

大学設置の陣頭指揮に当たった川崎明徳学園長（当時理事長）にお話をうかがいました。



1988年12月12日、「新大学設立準備委員会」第1回会合で挨拶する川崎明徳理事長（現学園長）と初代学長となる江草安彦先生

したが、「医療福祉」の理論と実践が熟成しつつあった昭和55年、ちょうど学園創立10年目に、4年制大学も検討することが決まりました。（中略）

議論を重ねました。社会福祉学に医療を重ねてやろう。理論だけじゃだめだ、医療技術も一緒にやろう。マネジメントも大切だ。

現実の難しさもあります。例えば、感覚矯正学科というのは全国でも現在に至るまで本学だけです。耳鼻と眼は同じ神経系だから一緒にしよう。でも医学では耳鼻咽喉科と眼科は分かれているので講師の調整はどうする。看護は技術か福祉か。看護はそれまでの医学の概念では“技術”とされていました。福祉のマインドが必要だ。そもそも医学とは何か。医療は技術か。本質論も戦わせ、また、人材が不足し社会が待望している職種は何か、とさまざまな検討を重ねました。

— 学園創立10年目に 4年制大学設立へ？

メディカルスペシャリストの養成は、既にその頃、医療短期大学とリハビリテーション学院で着実な実績をあげていました。学園卒業生以外からは採用しないという病院があるまでになっていました。

— 建築場所の決定の経緯は？

「ふるさとの森に30階建てのペンシル形の高層ビルを建て、ランドマークにする」というのが祐宣学園長（当時）の案でした。

しかし、4,000人近い学生や教員がエレベーターで上がり下がりすることになり、増築も難しく、既設の附属病院への影響も心配して皆が反対しました。工期も、文部省（当時）の認可から1年以内の決まりがあり、ふるさとの森は岩盤で基礎工事が短期で済むとはいえ、高層ビルは到底間に合わないと設計士の意見でした。

結局、拡張性があり自由に設計できる現在の場所に決定しました。祐宣学園長はこの案にかなり想いがあつたようで、へそを曲げて、建物が完成しても最初見に行かなかつたです（笑）

— 設置認可までの道のりは？

全国に先例のない大学ですから、文部省の受け止め方も複雑なようでした。

まず、文部省に『医療福祉』の概念を理解してもらうところからです。そういう概念が無いし、そういう大学も無い。“福祉”と名の付く大学や医科大学はあるが、『医療福祉』となると設置基準から考えないといけない。文部省へは何度も通いました。結局、理学部の設置基準に準じることになるのですが、ハードルが高く準備は大変でした。

新設大学では当時その例を見ない、入学定員500名の大規模大学でした。

（ヒストリア[4][5][6]より）